

アンセルムスとベックの修道院学校

矢 内 義 顕

序

おそらく1056年頃、アンセルムスは、父親との確執から生まれ故郷アオスタの町を後にし、溪谷を南に下り、モン・スニ峠を通過してアルプスを越える。伝記作者エアドメルスは、アンセルムスが3年近くをブルグンドあるいはフランスで過ごしたと述べる⁽¹⁾。ブルグンドとは、フランス王家領となったブルグンド公国を指し、フランスとは、ロワール溪谷のオイル語地域 (langue d'oil) と以北の地域を指す。前者にはオーセール、オートン、ヌヴェールなどの学校があり、後者にはオルレアン、トゥール、アンジェ、シャルトルの学校があった。12世紀に飛躍的に発展するパリの学校は、まだその頭角を現してはいない。アンセルムスがこれらの学校と教師たちについて何も知らなかったということはある得ない。しかし、彼はそれらのどこにも留まることなく、ノルマンディのアヴランシュを経て、1059年、ベック修道院の門を叩く。26歳のときである⁽²⁾。

本稿では、このベック修道院とその修道院学校の設立を述べ、さらにアンセルムスの書簡を通して修道院学校の教育および修道院的な知のあり方の一端を論じることにする⁽³⁾。

1. ベック修道院の創立とその修道院学校

(1) ヘルルイヌスによるベック修道院の創立

ベック修道院がノルマン人の騎士ヘルルイヌス（Herluinus 995頃－1078年）によって創設されたのは、1034年のことである。この点で、ベックは、カロリング朝以来の帝国の大修道院とは異なり、さらには、11世紀の初頭にノルマンディ公リシャール2世（在位996－1026年）が公領内の教会・修道院復興のために、クリュニー系修道院の改革運動の推進者だったイタリア人のサン＝ベニーニュのギヨームを招聘して設立したフェカン修道院などとも異なっている。幼い頃にベック修道院に奉獻され、修道士となり、後にウェストミンスター修道院長となったギルベルトゥス・クリスピヌス（Gilbertus Crispinus 1045頃－1117年）の『ヘルルイヌス伝』⁽⁴⁾によると、彼は、ノルマンディ公リシャール1世の孫であるジルベール（Gilbert de Brionne）に仕えていたが、騎士生活に嫌気が差し、37歳のとき神に仕える決心し、数人の仲間と共に彼の領地であったボンヴィル（Bonneville）で隠修士としての自給自足の生活を始める。しかし、この地は水の便も悪く生活に不向きであることから、1039年頃に同じ領内で小川のそばにあるベックに移り、そこでベネディクトゥスの『戒律』に従った修道生活を開始する。この点で、ベックは、後のシトー会修道院と類似していると言うことができよう。

ヘルルイヌスは、修道士になる前は文字を読むことができなかった。そこで、修道生活を始めてからは、昼は修道院の建設に携わり、夜には独学でラテン語を習得し、詩編を暗記し、聖書の意味を理解するまでに進歩した。『ヘルルイヌス伝』は次のように述べる。

「彼は、日中は学習することができなかったので、夜の時間の大部分を詩編集の暗記のために費やした。このキリストの新兵は、大いなる喜びをもってこの修練に励んだ。彼がアルファベットの習得したのは、すでに40歳近くになった

ときだった。だが、神の恵みの助けによって進歩し、聖書の言葉を説明し、理解するという点においては、文法の学識をもつ人々によってすらも奇跡にちがいないと見なされるほどになった。彼は、このことがただ神の恩恵の力のみによってなされたと確信し、この学習のために夜の時間だけを割いた。というのも、読書のために聖務日課に支障をきたすことがないからである」⁽⁵⁾。

ベネディクトゥスの『戒律』では、日に八回の聖務日課において⁽⁶⁾、一週間で詩編150編がすべて唱えられるように定めている⁽⁷⁾。それゆえ、ヘルルイヌスが最初に学ばなければならなかったのは、ラテン語で詩編を暗記し、その意味を理解することだったのである。

このようにヘルルイヌスは、独学で修道生活に必要なラテン語と聖書の知識を得たのだが、晩年に至るまで学問の必要性を重視し⁽⁸⁾、何よりも「学問のある者が修道士になることを望んだ」。それゆえ、「そうした者が彼の下に来ると、どれほど歓待され、受け入れられた後には、どれほどの寛大さと敬意が示されたことだろう」⁽⁹⁾と『ヘルルイヌス伝』は記す。

こうした一人がランフランクスであった。

(2) ランフランクスとベックの修道院学校⁽¹⁰⁾

1042年頃、すでに30歳を過ぎたランフランクス（Lanfrancus 1010頃－1089年）は、ベック修道院の門を叩く。彼の名はベックの『修道士名簿』の35番目に記されていることから⁽¹¹⁾、すでにこの時、ベックには少なくとも34人の修道士がいたことが分かる。

イタリアのパヴィアで生まれた彼は、自由学芸と法学を学び、すでに法学の領域でも名をなしていた。しかし、1030年頃、何らかの理由からイタリアを離れ、アルプスを越える。その後の足取りは分からないが、後に聖餐論を巡って彼の論敵となるベレンガリウス（Berengarius 1005頃－1088年）のもとで学んだり、あるいはシャルトルを訪れたりしたと思われる。そして、1039年頃、ノ

ルマンディのアヴランシュで自由学芸の教師をする⁽¹²⁾。11世紀のトゥールの聖アペル (St. Aper) 修道院の図書目録、および12世紀のベック修道院の図書目録には、『ランフランクス の弁証論理学』 (Lanfrancus de dialectica) および『ランフランクス の問題集』 (Quaestiones Lanfranci) が記載されており⁽¹³⁾、もし彼が弁証論理学に関する書物を執筆したとしたら、これらの時期かもしれない。しかし、ランフランクスは、何らかの理由から、世俗の学校における栄達の道を棄て、修道士としての生活を志すのである。

ランフランクスがベックの修道士となって3年後、ヘルルイヌスは、彼を副院長に抜擢する。こうして彼は、1063年にカーンの修道院長となってベックを離れるまでの20年間、修道院の管理と修道院学校での教育を引き受けることになる。当初、ベックの修道院学校は、修道院に奉獻された児童あるいはラテン語を知らない修道士たちを教育するための修道院の壁の内側のもの (院内学校) であったろう。当然のことながら、そこで教育されたのは、文法と修辞学であったと思われる。ランフランクスがプリスキアヌス (Priscianus 6世紀初頭) の『文法学綱要』 (Institutiones grammaticae) を註釈したことは、断片的な情報が残っていることから知られる⁽¹⁴⁾。またキケロの『発想論』 (De inventione) および『ヘレンニウスに与える修辞学書』 (Ad Herennium) に関する註釈を行なったことも断片的に知られている⁽¹⁵⁾。論理学についてはすでに述べたとおりである。

ランフランクスは、このように自由学芸の教育を携わるとともに、アウグスティヌスやグレゴリウス1世などの教父の著作の研究⁽¹⁶⁾、さらに聖書の研究・註解を開始する。これは1050年代の後半のことと思われる。そしてこの時期、ベックの修道院学校は、修道院の外部からの生徒を受け入れるようになる (院外学校)。おそらくは、修道院の建物を新築するための資金調達を目的としたものだったのだろう。すでにランフランクス の教師としての名声は知られており、多くの学生がベックにやって来る。前述の『ヘルルイヌス伝』は次のよう

に述べる。

「聖職者、諸侯の子弟、ラテン世界の学校の著名な教師たちが急ぎやって来た。権勢のある俗人、多くの高貴な人々が、彼に対する愛情から、その教会のために多くの土地を譲渡した。ベックの地はただちに設備、不動産、高貴な名誉ある人々に恵まれた。内では敬虔と知が大いに増し加わり、外面的には必要なすべてのものが供給され、溢れんばかりになり始めた」⁽¹⁷⁾。

さらにこのことを確証するのが、教皇ニコラウス2世（在位1058－61年）が1059年にランフランクスに送った書簡である。

「われわれは、われわれが愛する者たち、すなわち、皇帝および教皇の礼拝堂付き司祭たちを貴兄の下に派遣するので、彼らに弁証論理学と修辞学の学芸を教えていただきたい。これらの学芸において一聞くところでは一神が貴兄に特別の卓越した才を与えて下さったのである。…われわれは、目下、貴兄が聖書の研究に没頭していることを聞いている。それが事実だとしても、聖ペトロと私の名において、貴兄に命じる。私が貴兄の下に派遣した二人の礼拝堂付き司祭には、彼らを派遣した目的の学芸を教授することによって貴兄の従順を私たちに示してもらいたい。彼らを貴兄の愛徳に委ねるので、あらゆる点で彼らを助けてあげてほしい」⁽¹⁸⁾。

この書簡から、教皇がランフランクスに二人の司祭の教育—弁証論理学と修辞学—を委ねたこと、そしてこの時期に、ランフランクスが聖書の註解に本格的に取り組み始めたことが分かる。自由学芸の教師としてのランフランクス、そして聖書学者としてのランフランクスの名はすでにローマにおいても認められていたのである。それゆえ、この時期、フランスの各地を遍歴していたアンセルムスも、当然、ランフランクスの名を耳にしたことだろう。アンセルムスがベックに到着したのは、まさしくこの年であった。

2. アンセルムスとベックの修道院学校

(1) アンセルムスの選択

1059年にベックに到着したアンセルムスは、1063年にランフランク스가カーンの修道院長となってベックを離れるまで彼の下で学び、知的な才能を開花させていくことになる。それ以前に彼がどのような学問的な経歴を辿ってきたかは分からない。おそらく、彼は故郷のアオスタで下級聖職者であったし⁽¹⁹⁾、またエアドメルス『アンセルムス伝』は、彼が学問に打ち込んだ時期があったことに触れていることから⁽²⁰⁾、それなりの知的な訓練は受けていたに相違ない。さらに、アオスタを後にしてから、ブルグンド、フランスを放浪する間に、当時の知的な空気に触れたことも確かであろう。それゆえ、アンセルムスは、修道士になるか否かと悩んだとき、学問の世界での栄光を望む気持があったことも事実である。『アンセルムス伝』は次のように記す。

「自分は修道士になろう。だがどこで。クリュニーか、ベックか。いずれにしても自分が学問に費やしている時間はすべて失われてしまうだろう。クリュニーには厳格な規律があり、ベックには卓越した知恵をもつランフランク스가いる。彼はここの修道士なのだ。だから自分が実を結ぶこと際立つこともないだろう。それなら、自分の知識を示すことができ、多くの人々に役立つことができる場所で、自分の計画を実行に移すべきだろう」⁽²¹⁾。

ここでアンセルムスが悩んだ選択肢は三つである。その一つがクリュニー修道院である。だが、そこは典礼に割かれる時間があまりにも多く、学問に費やす時間がない。これに対して、ベックではクリュニーよりも学問に時間を費やすことはできる。しかし、ランフランク스가いる限り、自分が頭角を現すことはできない。だとしたら、どこか自分の才能を発揮することのできる世俗の学校に移るということであった。

しかし、彼も学問的な栄達を棄て、ランフランクスへの服従を決意するので

ある。そして3年後、ランフランクスの後を継いで、ベックの副院長となり、同時に修道院学校における教育の責任を負うことになる。

(2) 修道院学校の文法教育

彼の書簡の中には、断片的ではあるが修道院学校における教育の様子を伝えてくれるものがある。その一つに、彼が幼少の頃からその成長を見守った修道士マウリティウス⁽²²⁾に宛てた『書簡64』がある。1077/78年に執筆されたものだが、この時、マウリティウスは、ベックを離れ、カンタベリーにいる。アンセルムスは、マウリティウスに対してカンタベリーの修道院学校でアルヌルフスから文法をきちんと学び直すこと、それが適わない場合には、自習することを勧める。以下、この書簡から、修道院学校の文法教育について幾つかの点を考えてみることにする。まず本文を引用しよう。

「アルヌルフスが文法の教授 (in declinatione) に非常に秀でていることも聞いています。また、貴君もご承知のように、子供に文法を教えること (declinare) は私には常に重荷だったし、そのために、私のところでは貴君が自分の役に立つほど文法に (declinandi scientia) 習熟しなかったことは私も承知しています。そこで、最愛の子に命じます。どうか彼から手ほどきを受ける (ab eo legere) 書物、あるいは他の仕方で読むことができる書物すべてについて、できる限り勤勉に文法の復習 (declinare) をするよう努めて下さい。…もし彼が何も説明せず、それが貴君の怠惰のためであるなら、私にとっては残念なことです。私が貴君に望むことは、貴君ができる限り、とりわけウエルギリウス、そして、不道德な響きをもつものは除いて、私が教えなかった他の著作家を十分に読むことです。もし何らかの差し障りがあって彼の授業に出席できないなら、貴君がこれまでに読んだことのある書物、また読むことのできる書物を取り出し、できる時に、すべてを最初から最後まで文法の復習をするように努めて下さい」⁽²³⁾。

ここに登場するアルヌルフス（Arnulfus 1040頃－1124年）は、バックの修道院学校においてランフランクスから学んだ後、ボーヴェーの聖シンポリアヌス修道院の修道士となり、1073年頃、カンタベリー大司教となったランフランクスに請われてイングランドに渡り、カンタベリーのクライスト・チャーチ付属の修道院学校で20年間、文法教育に携わる⁽²⁴⁾。彼自身もまた、かつて世俗の学校での栄達を望んだことが別の書簡から知られる⁽²⁵⁾。アンセルムスは、自分が文法を教えることが苦手だったために、マウリティウスの文法の知識が不十分であることを案じ、アルヌルフスからしっかりと文法を学ぶようにと述べているのであるが、ここには修道院学校の教育の典型的な方法が示されている。

文法学の教師は、文法の初歩を教えるに当たり、何らかのテキストを読みあげ、生徒はそれを暗誦するか、蠟板に書き付ける。さらに、教師は、テキストに出てくる様々な語の文法的な語形、意味を説明する。こうした一連の過程が「彼から手ほどきを受ける」直訳すれば「彼によって読む」（ab eo legere）という表現で示されているのである。さらに、上の訳文で「文法学の教授」「文法を教えること」「文法の復習」等々と訳した言葉は、原語を示しておいたように、「語の屈折」（declinatio, declinare）という語である。つまり、教師は、一つ一つの語（名詞・形容詞・動詞）の変化・活用を生徒に口頭で行なわせたのである⁽²⁶⁾。教室での文法教育がこのようであったとするならば、同じことが自習の際にも行なわれたことが、「授業に出席できないなら、貴君がこれまでに読んだことのある書物、また読むことのできる書物を取り出し、できる時に、すべてを最初から最後まで文法の復習をするように努めて下さい」という一文で示されている。

こうした教育は、教師にとっても生徒にとっても忍耐を必要とするものであったに違いない。事実、アンセルムスは、こうした教育が自分には苦手だったと述べているが、同じことは、1073年頃に聖ペトルス・クルトゥラ（St Petri Cultura 現ソレーム）修道院の修道士アヴェスゴトゥス（Avesgotus）が

アンセルムスに送った『書簡19』とアンセルムスの返信『書簡20』からも窺うことができる。アヴェスゴトゥスは、青年となった彼の甥に文法を教授して欲しいとアンセルムスに依頼する²⁷⁾。これに対してアンセルムスは、文法を教えるということについては「私には、今のところ、その余裕もなければ、意欲もなく、機会也没有ありません」²⁸⁾と断っているのである。

また生徒の側でも、人によっては自分の母国語ではないラテン語を習得することは、しばしば困難を伴ったことが容易に想像できる。この書簡から約30年後の1103年、当時イングランドから追放されベックに滞在していたアンセルムスは、彼の甥である同名のアンセルムスに宛てた『書簡290』で「私が貴君をイングランドに送ったのは、貴君が進歩するよう熱心に励み、いかなる時も怠惰に過ごさないようにするためでした。そこで、文法の屈折と価値を学ぶように最大限の注意を注ぎなさい。書くこと、そして韻文よりも散文を練習しなさい」²⁹⁾と述べ、さらに、上述のアルヌルフスとカンタベリーの修道士たちに宛てた『書簡291』で、甥が学習に励むように面倒を見てくれと頼んでいる³⁰⁾。しかし、よほど怠け者だったのだろう。さらにそれから1、2年後の1104－1105年、なお追放中の身であったアンセルムスは、リヨンから『書簡328』を送り、その中で次のように記す。

「ところで、貴君に関してですが、私は忠告し命じます。決して怠けてはなりません。私が貴君をイングランドに残してきたのは、貴君が日々進歩するように努力するためです。文法学の価値を知るように努力し、毎日書くようにして下さい。とりわけ散文を。また難しく書くことを好むのではなく、平易に筋の通る書き方をして下さい。他に必要がないならば、常にラテン語で話して下さい。何よりも、正しい作法で落ちついて話すように心がけて下さい。おしゃべりは避けるように。人は、自分の知識を言葉数多くひけらかすよりも、沈黙と聴従によってより進歩し、他の人々の生活と言葉を熟慮することによって、進歩することができるでしょう」³¹⁾。

ここで、読むこと、書くこと、そして話すこと、語学の習得のために基本的な注意が再度なされている。「常にラテン語で話して下さい」と述べている点も興味深い。おそらく、この甥は、彼の母語（イタリア語）で話してしまうくせがあったのだろう。しかし、ここでアンセルムスが文法の学習を命じているのは、修道生活の進歩・充実という目的のためである点は注目すべきだろう。

(3) 古典の著作家たち

再びマウリティウス宛の書簡に戻ろう。その中でアンセルムスは、もしアルヌルフスから学ぶ機会がないならば「とりわけウェルギリウス、そして、不道徳な響きをもつものは除いて、私が教えなかった他の著作家を十分に読むことです」と述べていた。ここでアンセルムスがベックで文法を教えるさいに、ウェルギリウス（前70－19年）—おそらくは『牧歌』（*Bucolica*）⁽³²⁾—を教材として用いていたことが判明する。さらに、ランフランクス宛の『書簡57』ではホラティウスの『詩論』（*Ars poetica*）の詩句が⁽³³⁾、グイレンクス（*Guilencus*）宛の『書簡115』では、ルカヌス（35－65年）の叙事詩『内乱』（*Bellum civile*）の一節が引用される⁽³⁴⁾。「不道徳な響きをもつものは除いて」という但し書きは、古典の著作の中には修道生活に相応しくない内容をもつものがあることを考えれば、もっともなことである。当然、オウィディウスの作品などが考えられるだろうが、彼は、「良俗の教師、悪行を根絶する者」として修道院でも読まれていた⁽³⁵⁾。またアンセルムスがマウリティウスに宛てた別の書簡でヒポクラテスの『箴言』（*De Aphorismo*）とその『註釈』（*glossa*）の写本を送ってくれるように依頼し、さらにマウリティウスはガレノスの『脈拍について』—おそらくは『初心者のための脈拍論』（*De pulsibus libellus ad tirones*）—の写本を作成していたことも知られている⁽³⁶⁾。

アンセルムスそして当時の修道士が古典の著作家にも通じていたことを示す具体的な例が上述の修道士アヴェスゴトゥスとの往復書簡である。アヴェスゴ

トゥスは、アンセルムスの名声がランフランクスやヴィムンドゥス⁽³⁷⁾のように世に知られていないことを惜しみ、「貴兄は、詩人が『もし他の人がお前が知者であることを知らないのなら、お前の知っていることは何もならない』と言っていることを覚えておいでですか」⁽³⁸⁾と書き送る。これに対してアンセルムスは、「(その言葉は) ペルシウスがそう言っているように、(知識) の誇示を撃退するための言葉で、それを促すための言葉ではありませんから、私としては『私の知っていることなど、もしそれがどのようなことを他の人が知ったなら、何のことはない』とお答えしておきます」⁽³⁹⁾と返信する。アヴェスゴトゥスは、あえて名を伏せて「詩人」と言っているのに対し、アンセルムスは、ペルシウス (Persius, 34–62年) を名指し、しかも、その言葉 (『風刺詩』 I, 27) は詩人の意図からすると、知識の誇示を戒めるために言われている言葉だと返したのである。両者がペルシウスの詩をすべて読んでいたのか否かは不明であるが、この見事な応酬は、少なくとも、当時の文法教育において彼の詩がテキストとして使用されていたことを証しすると同時に⁽⁴⁰⁾、彼らの文学的な教養の水準を物語っている。そしてアンセルムスは、この書簡を「貴兄は、なぜランフランクスとヴィムンドゥスの名声がこの私よりも世に広まっているのかと尋ねておられますが、どのような花であれ、たとえ赤いという点では異ならないように見えても、薔薇の花に匹敵する香りを放つことはないということです」⁽⁴¹⁾と結ぶ。見事な謙遜表現と言えよう。

(4) 論理学と神学の教育

アンセルムスは初等文法を教えることに関しては不得手であった。しかし、彼が、ランフランクスと同様に、論理学を教えたことは間違いない。そのことは、彼が『グラマティクスについて』 (De Grammatico) という著作を執筆したことから明らかである。この著作について、彼は、『真理論』の序文で次のように述べている。

「私は、かつて、さまざまな時に、聖書の研究に関する三つの論考を執筆し、それらは、質疑応答の形を取り、質問する人物には生徒という名称が与えられ、他方、回答する人物には教師という名称が与えられている、という点で同じである。四つ目の論考も、私は同じ形式で公にし、弁証論理学の初学者にとっては無益ではない、と私は考える。それは『グラマティクスについて』という表題で始まる。だが、この論考は、前記の三つとは異なる研究に関わるため、これらの内に数え入れようとは思わない」⁽⁴²⁾。

ここで述べられている四つの著作のはいずれも、教師と生徒の対話で書かれており、修道院学校での質疑応答による教育から生まれた著作と考えられる。そして「聖書の研究」(studium sacrae scripturae)と呼ばれる三つの著作『真理論』『悪魔の堕落について』『自由意志論』は、神学的な著作であり、修道院長時代(1080-1086年)に執筆されている。だが、これらとは別に「弁証論理学」の初学者のために執筆されたのが『グラマティクスについて』である。この著作は、修道院学校における論理学のテキスト、あるいは自習用のテキストとして執筆されたと思われる。サザーンは本書の執筆時期を1060-63年、つまり、アンセルムスが修道士となって間もない時期に属すると考えているが⁽⁴³⁾、もしそうだとすると、アンセルムスは、こうした論理学的な修練を積んだ上で、神学的な研究・教育に進んだとも考えられる。ただし、彼は、ランフランクスのように聖書註釈を執筆することはなく⁽⁴⁴⁾、聖書の研究から生じる神学的な諸テーマを取り上げ、彼の最初の著作『モノロギオン』では「瞑想の模範」(exemplum meditationis)という形式で⁽⁴⁵⁾、また上記の三つの著作の場合は対話形式で論じたのである。

(5) 瞑想と神学

修道士が個々人で長時間、学問に専念することは難しい。上述のように、日に八回の聖務日課、さらにはベックのように経済的に恵まれなかった修道院で

は様々な労働がある。彼らがもし個人的な読書 (lectio)・瞑想 (meditatio) に時間を割くことができたとしたら、早朝か、労働の疲れを癒すための昼寝の時間、あるいは皆が寝静まった終課後である。後者の場合は灯火を必要としない夏期に限られるだろう。それでも、ベネディクトゥスの『戒律』が規定する一日のスケジュールから推定すると、一日のうち3-4時間は、読書ないし瞑想に割くことができる。彼らは、こうした時間に、聖書、教父の著作、古典の著作家をくり返し読み、その内容を反芻しながら、それらの意味を探究し、理解を深める。上記のマウリティウス宛の書簡の一節でもアンセルムスが勧めるとおりである。さらに、各人が読もうとする書物については、図書室から写本を取り出してくることもできるが、一冊の本を複数で読むことはできないから、当然、蠟版に自分が読む箇所を書き写し、読むということになろう。実際、アンセルムスは、彼の『祈禱』『瞑想』を執筆するさいに、こうしたことを配慮して段落分けを行なったことを、その序文で記している⁽⁴⁶⁾。また『モノロギオン』『プロスロギオン』が短い章で区切られ、各々に表題が付けられているのも同様であろう⁽⁴⁷⁾。

こうした読書と瞑想は、言うまでもなく、聖務日課を中心とする修道生活の充実、修道士の完成を目指すものであるが、この読書、瞑想、祈りの生活が同時に神学的な思索の生成する場にもなる。

事実、エアドメルスは、アンセルムスが『プロスロギオン』第2章の論証を思いついたのが暁課の最中であつたと述べている⁽⁴⁸⁾。それゆえ、この書物が祈りと論証が織り成す絶妙な構成によって書かれたことも当然であろう。また、この書物が執筆され、その写本が流布すると、ただちにマルムーティエの修道士ガウニロが第2章の論証に対して反論を提出し、アンセルムスがこれに応答したことは周知の通りである。その点では、本書は論争を生み出す書物であつた。しかし、隠修士フーゴーに宛てた『書簡112』において、もし永遠の至福の充溢について知りたいのであれば『プロスロギオン』を読んで欲しいと述べ

ている点も注目しておこう⁽⁴⁹⁾。アンセルムスにとって、神学的な思索は、究極的には修道生活の完成である永遠の至福を目指すものであり、修道院的な靈性と卓越した思弁的思索とが結合したところに、彼の真価があったと言えよう。

3. 世俗の学校と修道院学校

(1) 世俗の学校と修道院学校

アンセルムスがバックの副修道院長となって間もない1065年頃、ペトルス・ダミアニ（Petrus Damiani 1007–1072年）が一通の書簡をアリブランドゥスという修道士に送る。現在は『書簡117』とされるこの書簡は⁽⁵⁰⁾、ミーニュ版では、「コリントの信徒への手紙1」8章1節の「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」を踏まえて『人を高慢にする知識を排斥する聖なる純朴について』（De sancta simplicitate scientiae inflanti anteponenda）と題された『小品45』（Opusculum 45）として収録されている⁽⁵¹⁾。この書簡の中で、ダミアニは、優れた才能に恵まれながら若くして隠修士となったために、世俗の学問を学ぶ機会を逸してしまったことを後悔するアリブランドゥスに対して、世俗の学校とその学問がもたらす高慢の危険を説いている。またそれから数年後（1067年以後）、ダミアニは、ある修道院長（M）に送った『書簡153』において、ベネディクトゥスの『戒律』をないがしろにして、世俗の学問を学ぶことを熱望する修道士たちを非難する⁽⁵²⁾。ダミアニの批判は極端なまでに痛烈である。しかし、ここには修道院の生活とその学問、そして世俗の学校の生活とその学問との間に緊張が生じていたことを物語る。

アンセルムス自身も、修道士になるか否かと悩んだとき、学問の世界での栄光を望む気持があったことは、すでに指摘したとおりである。また上述の『書簡64』で、彼は、マウリティウスにアルヌルフスから文法を学ぶようにと勧めたが、このアルヌルフスもかつて世俗の学校での栄光を求めていることはすでに指摘した通りである⁽⁵³⁾。アンセルムスもこうした状況と無縁ではなかった。

1085年頃、彼は、ベックの支院でパリの北西部にあるコンフラン（Conflans-Sainte-Honorine）修道院の修道士たちに『書簡104』を送るが、そこでは次のように述べられている。「私の手紙を、学校のためにパリに滞在し、サン＝マグローワールで生活するサン＝ピエール＝シュル＝ディーヴの修道士ベネディクトゥスに送って下さい。彼に自分の修道院に戻るよう命じ、忠告します。彼は、修道院長の意志に反してそこから出ているからです。彼の修道院長は、もし彼が戻るならば、私への愛のゆえに、憐れみと柔和をもって迎えると約束しました。もし彼が望むのであれば、私の修道院の修道士と同じように愛徳による配慮によって寛大な助けの手を差し伸べ、私の修道院まで馬で、あるいはフレヌーズまで舟で来ることができるように取り計らいます」⁽⁵⁴⁾。

アンセルムスは、リジュー近郊のサン＝ピエール＝シュル＝ディーヴ（Saint-Pierre-sur-Dives）の修道院長フルコ（Fulco）⁽⁵⁵⁾の依頼でこの書簡を執筆しているのだが、ここで問題になっているのは、ベネディクトゥスという名の修道士が、パリの学校（scholae）で学びたいがために、修道院長の命令に背いて自分の修道院を飛び出し、サン＝マグローワール（Saint-Magloire）修道院に滞在しているということである。これに続くフルコ宛『書簡105』で、この修道士がアンセルムスの命令に従ったことが記されていることから、この一件は落着いたことが分かる。この時期、パリの学校がどの程度の発展をしていたかは別として、これらの書簡は、ペトルス・ダミアニが非難した状況の一例と見ることができよう。

(2) 「知識は人を高ぶらせ…」

ペトルス・ダミアニもそうであったが、パウロの「コリントの信徒への手紙1」8章1節の「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」（Scientia enim inflat, caritas vero aedificat）は、修道士たちが世俗の学校の知に対して、修道院的な知のあり方を語る際に好んで引用した言葉である⁽⁵⁶⁾。アンセルムス

は、書簡を含めた全著作の中で、一回だけこの箇所を引用する。それは、1077-78年頃にサン＝ヴァンドリュ（Saint-Wandrille）の修道士ヴァルテルス（Walterus）に宛てた『書簡85』である。ヴァルテルスは、アンセルムスに関するあらぬ噂を耳にしたことをアンセルムスに伝えると共に、何らかの問題の解決を彼に依頼したらしい。その返信の中でアンセルムスは前者に関しては感謝するが、後者に関しては十分な解答を執筆する時間も能力もないことをわび、次のように述べる。

「しかし、私の愚かさを軽蔑することで、私の心からの愛を軽視しないで下さい。愛は知識よりも愛されねばならないからです。『知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる』からです。つまり、あらゆる有益な知識は、愛に基づいており一律法全体と預言者とはこれに基づき（マタ22: 40）—また『二人または三人が』真理の『名によって集まるところには』、真理自身が『その中にいる』（同18: 20）と語られているからです。もし愛情をもって真理の名によって私たちが生活するなら、真理の知識が私たちに近づくのですから、私は真理の約束に固く信頼します」⁶⁷⁾。

この書簡で、アンセルムスは、「愛」（caritas）が「知識」（scientia）に優先し、愛による生活こそが真理の知識へと近づく道であることを簡潔に記しているが、このことに関するもう少し詳しい説明が、彼の『講話』（Dicta）に記録されている。この中でアンセルムスは「知識」（scientia）が「教え」（doctrina）、「経験」（experimentum）そして「理性」（ratio）によって獲得されることを述べた後⁶⁸⁾、「コリントの信徒への手紙1」8章1節を引用する。

「それゆえ、『知識』はこれらによって獲得されるが、『愛がそれを造り上げる』のでなければ、高ぶらせるものであるから、意志の善性がなければいかなる進歩も遂げることはない。ところで、善い意志とは神の意志に服従する意志である。この意志が神に服従するのは、この意志が望むべきであると神が望まれるとおりに、意志が望むときである。この意志が望むべきであると神が望まれた

ことを、この意志が抱くとき、それは義しい意志あるいは正しい意志と言われる」⁵⁹⁾。

ここで、アンセルムスは、「愛」を「意志の善性」「善い意志」と言い換え、善い意志とは、「神の意志に服従すること」、「意志が望むべきであると神が望むことを、意志が望むこと」であると述べ、それが実行されるとき、意志は義であり、正しいとする。これは、アンセルムスが『真理論』の第6章および第12章において論じる「意志の直しさ」(rectitudo voluntatis)であることは言うまでもない。そして、アンセルムスにとって、この神への服従が何よりも要求され、また実行されるのが修道生活であることは、彼が晩年(1106-1109年頃)、修道生活と意志の直しさについて、修道女たちのために平易に語った『書簡414』からも明らかである。

(3) ヴァルネルス宛『書簡335』

1104年頃、アンセルムスはリヨンから修道士ヴァルネルス(Warnerus)に宛てた『書簡335』を執筆する。ヴァルネルスは、ボーヴェーの司祭であったが、何らかの理由でそれを放棄し、同郷人だったアルヌルフスを頼ってカンタベリーを訪れ⁶⁰⁾、そこで修道士となることを決心する。しかし、その決心に揺らぎが生じたのかもしれない。

「私の最愛の兄弟よ、貴君のそばには副院長アルヌルフス師がいます。彼は、彼の知識と意志によって私に劣らず貴君に助言をし、私の権威によって貴君に赦しを与えることができます。私は、貴君を神と彼に委ね、貴君は、神に従い、私の助言と命令によって、自分自身を彼に委ねて下さい。神の恩恵により、貴君は学問的な教育を受けています。貴君がこの世への愛に留まっているときに、神の許しによって得た知識を、神への愛に向けて下さい。貴君が持っているものは、神からのものだからです。そうすれば、貴君が学問によって手に入れようと願っていたこの世の栄光に代わり、これまで貴君が軽蔑し、願い求め

ることに熱心ではなかった永遠の栄光を獲得するでしょう。貴君が入った私たちの共同体の慣習律を、あたかも神によって定められたかのごとくに熱心に守ってください。いかなる無益なこともなく、いかなる不必要なこともないからです。

ランゾー師がまだ修練士だったときに私が書いた書簡を探すように勧めます。貴君が修道生活の始めにおいてどのように振舞い、また修練士を襲う誘惑にどのように抗すべきかを、そこに見出すでしょう」^[61]。

この文面から、ヴァルネルスの躊躇は、世俗の世界での学問的な栄達への未練を捨て切れないことにあったことが推察される。しかし、アンセルムスは、ヴァルネルスに学問的な知識を神への愛に向け、世俗での栄光ではなく永遠の栄光を獲得するようにと説得する。40年以上前に彼が自分自身に下した決断を、このヴァルネルスにも迫るのである。この書簡の末尾でアンセルムスは、「ランゾー師がまだ修練士だったときに私が書いた書簡を探すように勧めます」と述べているが、これは、1072-73年頃、クリュニー修道院の修練士ランゾー（Lanzo 1107年歿）に宛てた『書簡37』のことである^[62]。修道生活への勧めとしてアンセルムスが執筆した書簡の中で最も美しい一通である。

結 語

1089年、ランフランク스가カンタベリーで歿し、4年間の空位の後、1093年、アンセルムスはカンタベリーの大司教となる。

バック修道院創設以来の55年間を手短に振り返ってみよう。ヘルルイヌスは、修道院生活における聖務日課のためにラテン語と聖書を独習した。ランフランク스가到来したことは、バック修道院の知的な営みを一変させる。彼の自由学芸の知識、弁証論理学を取り入れた聖書の研究・註釈は、その修道院学校の名を一躍有名にする。彼のもとで学んだアンセルムスは、論理的な思索と瞑想との総合を成し遂げる。それは、スコラ学と修道院神学の総合と言ってもよ

いだろう。そして、彼らにとって、これらの知的営みは、修道生活の完成を目指す全人格な営みから産み出され、またそれを目的とするものであった。

しかし、彼らがいなくなった後のベックの修道院学校には、もはや、かつての知的な輝きはない。その光輝は、ランフランクスという、その時代にあって卓越した教師、そしてアンセルムスの天才によっていたのである。

注(1) *Vita Anselmi*, l. I, c. v: Exactis dehinc partim in Burgundia, partim in Francia ferme tribus annis. テキストは, *The Life of St Anselm Archbishop of Canterbury by Eadmer*, Edited with Introduction, Notes and Translation by R. W. Southern, Oxford, 1962.

(2) 以上の記述については, cf. R. W. Southern, *Saint Anselm: A Portrait in Landscape*, Cambridge, 1990, pp. 11-13.

(3) 以下の記述については, cf. A. Porée, *Histoire de l'Abbaye du Bec*, Evreux, 1901, (Repr. 1980) Tome I, pp. 30-233; S. N. Vaughn, *The Abbey of Bec and the Anglo-Norman State 1034-1136*, The Boydell Press, 1981; P. Riché, 'La vie scolaire et la pédagogie au Bec au temps de Lanfranc et de saint Anselm' in *Les Mutations Socio-Culturelles au Tourant des XI^e-XII^e Siècles*, Éditions du CNRS, 1984, pp. 213-225; S. N. Vaughn, 'Lanfranc, Anselm and the School of Bec: In Search of the Students of Bec' in *The Culture of Christendom: Essays in Medieval History in Commemoration of Denis L. T. Bethell*, ed. by M. A. Meyer, The Hambledon Press, 1993, pp. 155-181.

古代末期から10世紀までの学校教育については、以下の邦訳がある。H. I. マルー『アウグスティヌスと古代教養の終焉』岩村清太訳、知泉書館、2008年、ビュール・リシェ『中世における教育・文化』岩村清太訳、東洋館出版社、1988年、同『ヨーロッパ成立期の学校と教育と教養』岩村清太訳、知泉書館、2002年。またカロリング朝から12世紀までの大聖堂付属学校、修道院学校の教育については、cf. C. W. Bynum, *Docere Verbo et Exemplo: An Aspect of Twelfth-century Spirituality*, Scholars Press, 1979; C. S. Jaeger, *The Envy of Angels: Cathedral Schools and Social Ideals in Medieval Europe 950-1200*, University of Pennsylvania Press, 1994; *Medieval Monastic Education*, ed., G. Ferzoco and C. Muessig, Leicester University Press, 2000.

(4) 本書について詳しくは, cf. C. Harper-Bill, 'Herluin, Abbot of Bec and His Biographer' in *Religious Motivation: Biographical and Sociological Problems for The Church Historian*, ed., D. Baker, Oxford, 1978, pp. 15-25.

(5) *Vita Herluini* 27-28: Et quia interdum nequibat, ediscendo psalterio noctem pene totam impendebat. His exercitiis multa iocunditate exercebatur nouus tiro Christi. Prima litterarum elementa didicit cum iam existeret annorum prope quadraginta; et diuina opitulante gratia eo usque processit, ut etiam ipsis apprime eruditus grammatica in exponendis ac intelligendis diuinarum Scripturarum sententiis merito haberetur mirabilis. Quod ut solius diuine gratia efficientie actum credatur, nocturnis tantum horis huic studio uacabat, quia propter lectionem nunquam diuini operis intermisit executionem. テキストは, *The Works of Gilbert Crispin*, ed., A. S. Abulafia and G. R. Evans, Oxford, 1986に所収。なお、この箇所に続いて29節で「彼は、キタラで主を讃美するだけでなく、十弦琴によって詩編を歌いたいと望んだので、適切に時間を配分し、一方でこの善き業に勤しみ、他方で読書と祈りに集中した」(Non solum in cithara confiteri

Domino, uerum et in psalterio decem chordarum psallere gestiebat, congrua temporum distributione, nunc attentus bone actioni, nunc intentus lectioni atque orationi.) とあり、文字通りに読むと、楽器を用いた讃美について述べている点は興味深い。Cf. *Dicta Anselmi*, c. III (*Memorials of Saint Anselm*, ed. R. W. Southern and F. S. Schmitt, O. S. B., Oxford, 1969, p. 118).

- (6) Benedictus, *Regula*, c. XVI.
 - (7) *Ibid.*, c. XVIII.
 - (8) *Vita Herluini* 106-108.
 - (9) *Ibid.*, 108: Litteratus aliquis uolens fieri monachus, quando ad illum ueniebat, qua exultatione suscipiebatur, que suscepto benignitas et ueneratio exhibebatur.
 - (10) 以下の記述については、cf. M. Gibson, *Lanfranc of Bec*, Oxford, 1978, pp. 1-62; R. W. Southern, *Saint Anselm: A Portrait in a Landscape*, Cambridge, 1990, pp. 14-66; H. E. J. Cowdrey, *Lanfranc: Scholar, Monk, and Archbishop*, Oxford, 1-23, 46-58.
 - (11) Porée, *op. cit.* Tome I, p. 629.
 - (12) アヴァンシュの学校については、cf. B. Jacqueline, 'Ecoles et culture dans l'Avranchin, le Mortainais et le Cotentin au temps de saint Anselme' in *Les Mutations Socio-Culturelles au Tourant des XI^e-XII^e Siècles*, Éditions du CNRS, 1984, pp. 203-212.
 - (13) Becker, *Catalogi Bibliothecarum Antiqui*, Bonn, 1885, no. 68, item 250; no. 54, item 6. ギブソンはこの点について否定的だが (*op. cit.* p. 49), サザーンは肯定的である (*op. cit.* p. 18, n. 6)。
 - (14) R. W. Hunt, 'Studies on Priscian in the eleventh and twelfth centuries' in *Mediaeval and Renaissance Studies*, i, 2, 1943, p. 206.
 - (15) Gibson, *op. cit.* p. 49-50.
 - (16) Cf. M. Gibson, 'Lanfranc's Notes on Patristic Texts' in *'Artes' and Bible in the Middle Ages*, Variorum, 1993.
 - (17) *Vita Herluini* 62: Accurrunt clerici, ducum filii, nominatissimi scholarum Latinitatis magistri; laici potentes, alta nobilitate viri multi, pro ipsius amore multas eidem ecclesie terras contulere. Ditur ilico Beccensis locus ornamentis, possessionibus, personis nobilibus et honestis. Interius religio atque eruditio multum accrescere, exterius rerum omnium necessarium subministratio cepit ad plenum habundare.
 - (18) Hos igitur nostrae dilectionis filios, imperatorios capellanos et nostros, dialectica et rhetorica arte caritati vestrae mittimus edocendos, ut sicut te, Deo gratias, singularem in hoc bivio audiuimus,...
- Si vero divina, ut audiuimus, pagina ab huiusmodi studio vos retinet, ex parte sancti Petri et nostra vobis precipimus, et ex vera oboedientia illos edocendos vobis mandamus, quos ad hoc vestrae dilectionis mittimus, et vestre caritati in omnibus subueniendos relinquimus. テクストの全文は Southern (1990) pp. 32-33 に印刷されている。
- (19) *Vita Herluini* 98: Arbor fructibus optima fuit uenerabilis Anselmus ecclesie Augustensis clericus, ...
 - (20) *Vita Anselmi* l. I, c. iiiii: Studium quoque litterarum in quo se magnopere solebat exercere.
 - (21) *Vita Anselmi*, l. I, c. v.: 'Ecce' inquit 'monachus fiam. Sed ubi? Si Cluniaci vel Becci. Totum tempus quod in discendis litteris, et Becci supereminens prudentia Lanfranci qui illic monachus est, me aut nulli prodesse, aut nichili valere comprobabit. Itaque in tali loco perficiam quod dispono, in quo et scire meum possim ostendere, et multis prodesse.
 - (22) マウリティウスについて詳しくは、cf. 拙稿「アンセルムスとマウリティウス」『文化論集』第18号, 2001年3月, pp. 1-21.

- (23) *Ep.* 64, 4-9, 13-18: *Audiui quoque quod ipse (Arnulfus) multum valeat in declinatione, et tu scis quia molestum mihi semper fuerit pueris declinare, unde valde minus quam tibi expediret, scio te apud me in declinandi scientia profecisse. Hortor itaque et precor et ut filio carissimo praecipio, quatenus quidquid ab eo legeris et quidquid aliud poteris, diligentissime declinare studeas.... Si autem nihil tibi legit et tua hoc est negligentia, displicet mihi, et volo quatenus ut fiat, quantum potes satagas, et praecipue de VIRGILIO et aliis auctoribus quos a me non legestis, exceptis his in quibus aliqua turpitudine sonat. Quod si aliqua re obstante non potes ab eo legere: vel hoc stude ut librorum quos legisti, quoscumque potes et quibus horis potes, totos a principio usque ad finem diligentissime, sicut supra monui, declines.*
- (24) 詳しくは、cf. 拙稿「アンセルムスとアルヌルフス」『文化論集』第14号、1999年3月、pp. 35-53.
- (25) *Ep.* 38, 16-19: *Praeterea quod studio scholarum vitam vestram, ex quo saeculo renunciatis, impenditis, nullatenus vobis expedire cognoscetis, si et vestri finem propositi, et quo exercitio illuc perveniatur, consulitis.*
- (26) この点については、cf. J. ルクレール『修道院文化入門—学問への愛と神への希求』神崎忠昭・矢内義顕訳、知泉書館、2004年、pp. 159-162.
- (27) *Ep.* 19, 7-9: *Habeo quemdam meum nepotem iam iuvenem, quem super omnia curo; et si ferre valeres, desidero eum manere tecum, tuo ut grammate erudiat.*
- (28) *Ep.* 20, 7-9: *Non enim eiusmodi studii, in quo possit proficere delectus ille vester, de quo scripsistis, est mihi nunc licentia nec intentio vel opportunitas, sicut fuit olim vel putat vestra sanctitas.*
- (29) *Ep.* 290, 4-8: *Quapropter moneo te et praecipio tibi sicut filio dilectissimo, quatenus ad hoc, pro quo te in Anglia dimisi, sollicite proficere studeas et nullum tempus in otiositate transeas. In declinatione et virtute grammaticae cognoscenda maxime intende; in dictamine, et plus in prosa quam in versibus, te exerce.言うまでもなく、この一文の冒頭は、ベネディクトゥスの『戒律』第48章の「怠惰は魂の敵である。そこで兄弟は、一定の期間を手仕事に従事し、さらに一定の時間を聖なる読書に従事しなければならない」(Otiositas inimica est animae; et ideo certis temporibus occupari debent fratres in labore manuum, certis iterum horis in lectione divina.)を念頭におり、また「沈黙と聴従」についても、同じく『戒律』第6章の「語り、教えることは師に許されていることで、弟子は沈黙し、聴従することがふさわしい」(Nam loqui et docere magistrum concedet, tacere et audire discipulum convenit.)などが踏まえられている。*
- (30) *Ep.* 291, 22-24: *Gratias vobis ago pro caritate quam impenditis nepoti nostro; et illi praecipio, ut vobiscum maneat et doctrinis et litteris studeat, donec ego sibi mandem ut veniat.*
- (31) *Ep.* 328, 19-23: *Quod autem pertinet ad te, mando et praecipio tibi, ut nullatenus sis otiosus, sed in hoc propter quod in Anglia te reliqui, in dies studeas proficere. Virtutem grammaticae stude cognoscere, dictare cotidie assuesce, et maxime in prosa. Et ne multum ames difficile dictare, sed plane et rationabiliter. Semper, nisi cum necessitate aliter te cogit, Latine loquere. Super omnia bonis moribus et gravitate intende. Loquacitatem fuge. Plus enim proficit homo tacendo et audiendo et quid de aliorum vita et dictis possit proficere considerando, quam scientiam suam verbositate, nulla necessitate cogente, ostentando.*
- (32) Cf. *Ep.* 2, 84.
- (33) *Ep.* 57, 8.
- (34) *Ep.* 115, 36.
- (35) J. ルクレール *op. cit.*, pp. 154-155. 12世紀の修道院神学者サン＝ティエリのギヨーム (Guillaume de Saint-Thierry 1085頃－1148年) の『愛の本性と尊厳について』(*De natura et dignitate amo-*

ris)の冒頭の言葉「技芸のなかの技芸、それは愛の技芸である」(Ars est artium ars amoris)は、そのことを反映している(翻訳は中世思想原典集成10『修道院神学』編訳|監修 矢内義顕, 平凡社, 1997年, pp. 291-346に収録)。

(36) *Ep.* 43, 27-34; *Ep.* 60, 11-19.

(37) エヴルー (Évreux) 近郊のラ=クロワ=サン=ランフロワ (la-Croix-Saint-Lenfrei) 修道院の修道士、後のアヴェルサ (Aversa) の大司教となる (1088-1095頃) ギイトムンドゥス (Guitmundus) のことであろう。

(38) *Ep.* 19, 14-16: Quid non recordaris poetae dicentis: 'scire tuum nihil est, nisi te scire hoc sciat alter'?

(39) *Ep.* 20, 14-18: Denique ad id quod mihi dicitur in epistola vestra: 'scire tuum nihil est, nisi te scire hoc sciat alter': quamquam PERSIUS id dixerit, ut ostentationem reprimeret non ut exprimeret, respondeo: 'scire meum nihil est, si quale sit hoc sciat alter'.

(40) ペルシウスが修道院著作家に愛読されたことについては, J. ルクレール *op. cit.*, pp. 151, 156, 185. クレルヴォーのペルナルドゥスは, この書簡で引用された章句を用いて, 学問の虚しさを非難している。「知ることを目的として知ることを欲する者たちがいる。恥ずべき好奇心である。自分が知られたいがために知ることを欲する者たちがいる。恥ずべき虚栄である。このような人々には, 確かに, あの風刺詩人(ペルシウス)の嘲笑を逃れることはないだろう。このような人に詩人は歌いかける。『もし他の人がお前が知者であることを知らないのなら, お前の知っていることは何にもならない』と。また自分の知識を切り売りするために知ることを欲する者たちがいる。たとえば, 財産や名誉のために。恥ずべき強欲である。しかし, 徳を教えるために知ることを欲する者たちもいる。これが愛徳である。また徳を教えられるために知ることを欲する者たちもいる。これが賢慮である。』(Sunt namque qui scire volunt eo fine tantum, ut sciant: et turpis curiositas est. Et sunt qui scire volunt, ut sciatur ipsi: et turpis vanitas est. Qui profecto non evadent subsannantem Satyricum et ei qui eiusmodi est decantantem: Scire tuum nihil est, nisi te scire hoc sciat alter. Et sunt item qui scire volunt, ut scientiam suam vendant, verbi causa pro pecunia, pro honoribus: et turpis quaestus est. Sed sunt quoque qui scire volunt, ut aedificent: et caritas est. Et sunt item qui scire volunt, ut aedificetur: et prudentia. *Sermones super Cantica Canticorum*, 36, 3.)

(41) *Ep.* 20, 19-21: Quod vero quaeritis, cur fama LANFRANCI atque WIMUNDI plus mea per orbem volet: utique quia non quilibet flos pari esse rosae fragrat odore, etiam si non dispari fallat rubore.

(42) *De Veritate*, Praefatio: Tres tractatus pertinentes ad studium sacrae scripturae quondam feci diversis temporibus, consimiles in hoc, quia facti sunt per interrogationem et responsionem, et persona interrogantis nomine notatur discipuli, respondentis vero nomine magistri. Quartum enim, quem simili modo edidi, non inutilem, ut puto, introducendis ad dialecticam, cuius initium est De grammatico: quoniam ad diversum ab his tribus studium pertinet, istis nolo connumerare.

(43) Southern *op. cit.*, pp. 62-65.

(44) アンセルムスの聖書研究については, cf. 拙稿『Studium sacrae scripturae—アンセルムスと聖書—』『中世思想研究』第41号, 1999年, pp. 1-15.

(45) *Monologion*, Prologus, 5-6.

(46) *Orationes*, Prologus, 9-12.

(47) Cf. *Monologion*, Prologus, 21-23.

(48) *Vita Anselmi*, l. I, c. xix.

(49) *Ep.* 112, 74-77.

- (50) *Die Briefe des Petrus Damiani*, Teil 3: Nr. 91-150, hersg. Von K. Reindel (*Monumenta Germaniae Historica, Die Briefe der deutschen Kaiserzeit*, IV. Band), München 1989, SS. 316-329に収録。邦訳は、『書簡117—聖なる純朴について』矢内義顕訳（中世思想原典集成7『前期スコラ学』編訳 | 監修 古田暁, 平凡社, 1996年, pp. 26-45所収）。
- (51) *PL* 145, cols. 695-704.
- (52) *Ep.* 153 (=Op. 13): Ut autem cum stomacho loquar, ex istorum numero sunt ii, qui grammaticorum vulgus adeunt, qui relictis spiritualibus studiis, addiscere terrenae artis ineptias concupiscunt: parvipendentes siquidem regulam Benedicti, regulis gaudent vacare Donati... (*PL* 145, col. 306)
- (53) Cf. 注(25)
- (54) *Ep.* 104, 3-11: Mittite nostras litteras BENEDICTO, monacho de Sancto Petro supra Divam, qui propter scholas moratur apud Parisium et conversatur in monasterio Sancti Maglorii. Mando enim illi et consulo ut ad monasterium suum redeat, a quo contra voluntatem abbatis sui abest. Promisit enim idem abbas eius mihi se illi misericordiam et mansuetudinem pro nostro amore, si redierit, exhibiturum. Quod si facere voluerit, omnino illum sicut monachum de nostro monasterio caritativa sollicitudine benigne iuvate, quatenus aut equo usque a nostrum monasterium aut navi usque Frainsosam venire possit.
- (55) Cf. *Ep.* 61; 88.
- (56) Cf. J. ルクレール *op. cit.*, pp. 263-267.
- (57) *Ep.* 85, 25-32: Precor tamen, ne despiciendo meam fatuitatem contemnatis viscere nostram caritatem. Plus enim debet amari caritas quam scientia »Scientia enim inflat, caritas vero aedificat«. Denique quoniam omnis utilis scientia pendet ex caritate – ex ea quippe »universa lex pendet et prophetae« -, et quoniam ubi » duo vel tres congregati« fuerint » in nomine« veritas, ibi ipsa se esse » in medio eorum« dicit: confido in promissione veritatis, si convenerimus in eius nomine cum affectu caritatis, quia aderit nobis scientia veritatis.
- (58) *Dicta Anselmi*, c. III: Tribus itaque causis videtur mihi illam (scientiam) nancisci posse: doctrina scilicet, experimento, ratione. Per doctrinam quippe, quae capitur lectione et sermone, scientia acquiritur, quia quisquis legit aut legentem sive loquentem audit, ad hoc ut eorum, quae referuntur, scientiam habeat intendit. Experimento vero acquiritur scientia, dum rei, quam aliquis probaverit, certam habeat notitiam. Ex ratione quoque percipitur, cum per naturalem mentis discretionem in illis quae agenda sunt quis solidatur. Cf. *De Incarnatione Verbi*, c. I, 9, 5-8.
- (59) *Ibid.*: 'Scientia' igitur his acquiritur, sed quia 'inflat', nisi eam 'caritas aedificat', nil prorsus profit absque bonitatis voluntate. Voluntas itaque bona est quae dei voluntati subiecta est. Quae tunc voluntati dei subiecta est, quando id vult quod deus vult illam velle debere. Et tunc iusta sive recta dicitur, quando id quod deus vult, sed hoc debere amplectitur.
- (60) *Ep.* 331, 40-43: De clerico Belvacensis quem deus vobis clementer attraxit, gaudeo, et ut saepe vestro colloquio aedificetur de contemptu gloriae mundi et de dubietate humanae vitae et de periculo animarum de hoc mundo transeuntium in amore saeculi, quamvis hoc vos facere putem, consulo.
- (61) *Ep.* 335, 16-28: Habes tecum carissimum fratrem meum, domnum priorem ERNULFUM, praesentem, qui non minus quam ego tibi et scientia et voluntate potest consulere et te mea auctoritate absolvere. Deo et illi te committo, illi post deum tu ipse te nostro consilio et nostra iussione committe. Gratia dei litteratus es; scientiam quam deus in amore saeculi te permisit

acquirere, ad amorem dei, a quo habes si quid habes, converte, ut pro gloria terrena, ad quam per litteras tuas anhelabas, gloriam aeternam adipiscaris, quam aut contemnebas aut tepide desiderabas. Consuetudines nostri ordinis quem es ingressus, quasi a deo constitutas studiose serva, quia nulla inutilis est, nulla supervacua. Consulo tibi ut quaeras epistolam quam ego feci domino LANZONI, quando novitius erat. Ibi enim invenies, qualiter te in principio conversionis debeas habere et tentationibus novitium impugnantibus respondere.

62) 拙訳が、中世思想原典集成10『修道院神学』編訳 | 監修 矢内義顕, 平凡社, 1997年, pp. 59-67に収録。